

第一問 左は、梅澤佑介『民主主義を疑ってみる』の一節である（ただし、一部改変した）。これを読んで、後の問いに答えよ。

政治学において「政治」とはいったいどのような営みとして考えられてきたのでしょうか。一般に、現在「民主主義^{デモクラシー}」という政治システムを採用している国家で用いられている「政治（politics）」概念の起源は、「民主政（デモクラティア）」誕生の地である古代ギリシアにさかのぼると考えられています。この古代ギリシアにおいて、政治について体系的に考える「政治思想」や「政治学」といったものも始まることになりますが、その初期の哲学者であるアリストテレス（前三八四―前三二二）は、政治というものを人間特有の営みとして位置づけました。

アリストテレスによれば、一方で人間以外の動物は、あらかじめ定められた自然の法則（物理法則などの外的なものから本能のような内的なものまで）に一方的に従うだけの存在です。例えばボウリングの球を思い浮かべてください。ボウリングの球は投げる際に加えられた回転の向きなどによって、右に行ったり左に行ったりしますが、ボウリングの球自体が意志を持ってどちらに曲がるかを選択しているわけではありません。アリストテレスにおいては人間と対比されたときの動物もこのような無機物と同じようにイメージされます。

それに対して他の動物とは区別されたものとしての人間は、自らが従う法^{ノモス}を自らの手でつくり上げることができます（この「ノモス」という古典ギリシア語はなかなか厄介で、「法」のほかに「慣習」や「人為」と訳されることもある、意味の幅が広い言葉です）。この自ら「法をつくる」という行為の中に、「政治」というものの本質があると考えられていました。つまり人間は、他の動物とは違って、定められた運命に対して一方的に従属するだけの存在ではなく、選択意志を発揮して、人為^{ノモス}によって自ら運命を切り開いていくべき存在だということです。このように古代ギリシアにおける「政治」の概念は、人間らしい生き方（善き生）という観念と密接に結びついたものでした。

ところがその後、ギリシアからローマへと地中海世界の覇権が移り、さらにローマが共和政から帝政に移行すると、多くの人びとにとってこのような「政治」概念は現実味を失っていきます。一般民衆が政治から締め出されたことで、政治は変えることのできない「運命」のようなものとして感じられるようになったのです。

古代の運命観の変化を象徴するものとして、東ゴート王国^(注1)の哲学者ボエティウス（四八〇頃―五二四）の運命観が挙げられます。彼は運命を「盲目の女神」に喩^{たと}えました。政治や戦争といった公的な場で勇敢に振る舞えば、運命の女神が褒美を与えてくれる。かつてギリシアやローマの男たちはそのように考え、公的な事柄に積極的^⑦にケン身^{けんみ}していました。

しかし、ボエティウスはこのような運命観を否定します。運命の女神は盲目である。それゆえ人間がいくら頑張ったところで、運命の女神はそれを見てくれない、と。運命は人間の努力とは無関係にあらかじめ定められている。そして政治も同様に、一般民衆の努力によってどうできるものではない。長い中世という時代には、政治に携わることのできたごく少数の人びとを除いて、法の作成に参加することで自ら運命を切り開いていくという発想自体が広く失われていきました。

^Bこのような運命観に再び変化が生じたのが、古代的な価値観が復活した「ルネサンス」という時代です。なかでも「近代政治学の祖」として位置づけられるニッコロ・マキアヴェッリ（一四六九―一五二七）は、ルネサンスによって甦^{よみがえ}った古代の運命観に基づき、人間の活動の半分が運命に、もう半分が力量に委ねられていると述べました。むしろ、彼は人間があらゆる物事を思い通りにコントロールできると言ったわけではありません。人間の活動には運によって左右される部分もあります。

しかしながら、人間は運命に^い対処することのできる存在です。そこで彼は運命の女神を「破壊的な河川」に喩えています。例えば毎年決まった時期に氾濫する河川があるとしましょう。そのこと自体は自然の摂理で定められており、人間が変えることはできません。ですが、増水することが分かっているのであれば、堤防を築くなどして人為的に対処することはできます。このように状況に応じて臨機応変に対処する能力を、彼は「力量（ヴィルトゥ）」と呼びました。そして近代民主主義の成立にとってはこのような運命観の変化が不可欠でした。

では「現代」はどうでしょうか。現代日本においても、政治は自分たちの力によって変えることができるものと信じられているでしょうか。

結論から言うと、現代は

C

時代であると言えます。というのも、多くの国々で普通選挙が実現した結果、投

票を媒介にした政治責任を多くの人びとが受け持つことになった一方で、一人一人の実質的な政治的影響力とそれに伴う政治責任の実感はきわめて薄いものへと希釈されてしまったからです。投票権がある人のほうがない人よりも当然政治責任は重いわけですが、それでも政治家ではない人たちからすればピンと来ないものでしょう。実際、現代日本の政治的無関心の背後には、このような市民一人一人の政治的影響力と政治責任の実感のなさがあります。

D1

、中世ヨーロッパ世界と決定的に異なるのは、現代日本には自由民主主義的な諸制度が実現しているということ

です。私たちは何か政治的な意見があればそれを気兼ねなく発信することができますし、投票を通じて政治に参加することもできます。日本国憲法に「国民主権」が明記されていることはもはや常識となっています。にもかかわらず、「主権者」としての自覚を持っている人が日本にどれほどいるかは、投票率の低さが示すところです。

D2

、生きていくだけで政治責任があるなんて言われたら、億劫な気分になるのも無理はありません。誰もがそのような責任から逃げ出したくなるでしょう。実際、社会心理学者のエーリッヒ・フロム（一九〇〇―八〇）は、近代人が自由を手にした結果、その自由に伴う責任の心理的な重みに耐え切れず、かえって自由を放棄することになるメカニズムを描き出しています。ドイツ生まれのユダヤ人であったフロムは、亡命先のアメリカで発表した『自由からの逃走』の中で、ナチス政権成立の心理的要因を分析しました。

キリスト教的な価値観が支配的だった中世封建社会においては、主に宗教的な教義が一般の人びとにとっても判断の拠りどころとなっていました。しかし近代化が進むにつれて、人びとは宗教的な価値観から解放され、法的にも社会的にも個人の自由な判断の余地が認められるようになります。さらに選挙権の拡大が進むと、人びとはいよいよ政治的な判断にも投票というかたちで加わるようになりました。

、これらの自由は近代人にとっての悩みの種でもありました。というのは、自由には責任が伴うからです。中世キリスト教世界においては、例えば聖職者のような存在が自分たちに代わって判断を下してくれていました。一般の人びとは、キリスト教の教義に則った①セイ貧のつとな生活をしていれば魂の救済が保証されていたのです。それに対して世俗化した世界を生きる近代人たちは、誰にも頼らず自ら判断を下し、そしてその判断に伴う責任を負わされることになりました。この重責から逃れる方法はたった一つ、それはキリスト教に代わる新たな権威を見つけることでした。この「新たな権威」とは言うまでもなくヒトラーのような独裁者のことです。

フロムの結論の要点の一つは、ヒトラーという一人の独裁者が企てた陰謀のように思われているナチス・ドイツの成立という出来事の責任を、ドイツの一般大衆にも見いだしたことにあります。ヒトラーは民主主義的な手続きによって合法的に選出された独裁者でした。ワイマール憲法という当時最も先進的で民主主義的と言われた憲法を有していたドイツ人は、第一次世界大戦の多額の賠償金による難局を乗り切るため、話し合いにこだわる議会ではなく、カリスマ的指導者による独裁に期待をかけたのです。これはいわば「民主主義による民主主義の自殺」でした。

独裁者に判断を丸投げすることにより、人びとは主観的・心理的には政治責任から解放されたかもしれませんが、事実を客観的に見れば依然として政治責任は独裁者を選んだ人びとにあります。このようにフロムの研究は、政治責任から逃れることのできない人間の厳しい現実を突きつけるものでした。

E

政治責任から逃れる方法は本当にはないのでしょくか。最後の頼みの綱として、「投票に行かない」という選択肢が残されているように見えるかもしれませんが。しかし残念ながら、この方法によっても、私たちは政治的選択から逃れることはできません。これに関して、戦後日本を代表する政治学者の丸山眞男まるやままこと（一九一四―一九六）が、「政治から逃避することが、そのまま、それ自身が政治的意味をもつ」という逆説を指摘しています。つまり政治に無関心でいること、あるいは自分は政治に明るくないからといって選挙に行かないでいることは、一見政治的には無色透明で「中立」を保っているように見えますが、結果的には時の為

政者に白紙委任状を渡し、「専制政治を容易にする」のに協力していることになります。

このように政治学においては、道徳とは異なり、内面でどう思っているかにかかわらず、外面的にどのような世界をつくり出すのにコミットしているかが問われることになります。「無為自然」という言葉がありますが、いかに政治的選択を回避し、自然に身を任せて生きていこうとしても、その政治から逃れようとする選択自体が政治に影響を及ぼすのです。その意味で、作為（何かをすること）だけでなく無為（何もしないこと）からも政治責任は生じると言えます。

以上で述べてきたように、私たちは社会の中に生きている限り、政治的選択を完全に回避することはできません。選挙に行かなかったからといって、私たちの政治責任が解除されることはありません。だからこそ私たちは、自身の政治的判断を少しでもマシなものにしていくために、政治学という学問を学ぶ必要があるのです。

それではいったいどうすればこの重くのしかかる政治責任を果たしていくことができるのでしょうか。ここで人間にできることとできないことを確認しておく必要があります。

人間は全知全能の神ではありません。自分の思うがままに世界をつくり変えることはできませんし、慣性の法則や万有引力の法則といった自然法則を一から設定し直すこともできません。外面的な自然はおろか、自身の内面的な本能ですら完全に統御することはできません。一見明確な意図や見通しをもって行われたと思われる行為にも、「意図せざる帰結」が伴うことが多々あります。したがって、人間にはある行為がもたらす社会的帰結を完全に予測したうえで行動することは不可能なのです。

このことは政治と学問の違いとしても表れています。一方で学問（あるいは広い意味での哲学）は、真理の永続的探究に従事します。人間は全知全能の神とはなりえないにもかかわらず、常に学問という営みを通じて、永遠不変の真理に近づこうと努力を続けてきました（一方でこのような行為は神への挑戦とみなされ、例えばバベルの塔の寓話^{ぐうわ}に見られるように、ときには人間自身によって戒められることもありました^F）。学問の自由が守られている限り、その営みが中断することはありません。

他方で政治においては、節目節目で「決断」が要求されることになります。人びとは必ずしも満足のいく検討が行われていな

いなかでも、その問題に関する暫定的な結論を出すことが求められます。このように不可避免的に不十分な決断を積み重ねていかなければならないのが、学問とは区別された政治という活動の特徴であると言えます。

いくら科学技術の進歩した現代といえども、人間は万物を統制下に置く神になったわけではありません。人間の知識は日々更新されていきますし、いま「常識」とみなされていることも、いつかは「旧ヘイ」や「迷信」として全面的に廃棄されるかもしれません。あのアインシュタインでさえ、晩年にはかつて原爆開発の推進に加担したことに対する悔^(注3)コンを口にしたと言います。天才的な科学者でさえ、自分の行動がもたらす帰結のすべてを見通すことはできません。人間社会から「後悔」という言葉がなくなることはないでしょう。人民は無^む謬^{めう}の存在ではないのです。

とはいえ人間は自然法則によって完全に規定された存在ではありません。人間は「選択意志」を持つ存在であり、一人一人の人間がどのように動くかを科学が完全に予測することは不可能です。この「意志」を持つことによる人間の予測不可能性が、いわゆる社会科学と呼ばれる分野をより複雑なものとしています。そして一般に社会科学に分類される政治学は、人間の多種多様な意志が複雑に絡み合っ^(注4)て営まれる「政治」について探究していかなければならないのです。

もちろん政治学の歴史の中で、人間を不変の法則に従って動く「物体」のような存在として捉え、自然科学的な手法で人間社会の運動法則を明らかにしようとした人もいました。一七世紀のイングランド内乱期を生き^(注4)たトマス・ホッブズ（一五八八—一六七九）という哲学者は、人間の根本的な原動力を自己保存欲求に見いだし、そこから絶対主義国家の正当性という結論を導き出そうと試みました。要するに、いまイングランドでキリスト教の解釈をめぐって争っているアングリカンという宗派もピューリタンという宗派も、宗教的な教義の違いを超えてどちらも「人間」である限りは、「生命を維持する欲求を持つ」という点で一致しており、そしてその欲求を満たすためには、絶対的な権力を持つ国家に対してみんながおとなしく従うべきだということです。

しかしながら、ホッブズのこのような試みは、その後の政治学史の展開を見ると必ずしも成功を収めたとは言えません。とい

うのも国家は完全に善なる神のような存在ではなく、恣意的に権力を行使する可能性があるため、国家がかえって臣民の生命を脅かすこともありうるからです。またそのような実践的な問題に加えて、人間の動物的な側面をことさらに強調するホッブズの政治理論は、「自分を縛る法律ノモスの作成に自分も関わる」という人間固有の能力を重視するアリストテレス以来の伝統的な政治学にコミットする人びとにとっては到底受け入れられないものでした。

人間は生存本能のような自然法則ビュシスによって一方的に規定されて動く物体のごとき存在ではなく、自らに法を課しノモス、そのことにより「内なる自然」としての本能をある程度統御することができ存在です。神が自然界に法則を与えたように、人間は社会を法則に服せしめることができます。問題はその「神」の代わりを誰が務めるかです。ホッブズが望ましいと考えたように、絶対的な権力を持つ君主（または合議体）が「神」の代わりを務めることもできますが、その君主は全知全能の神でもなければ完全に善なる神でもないということを忘れるべきではありません。かといって民主主義を採用したとしても、「人民」もまた神ではないのです。

政治学を学ぶ者にはこのようなバランス感覚が求められます。自然によって一方的に規定される存在ではなく、自然をある程度統御することはできるものの、かといって自然から完全に自由でもない、言ってみれば「半神半ジュー」^①のような存在としての人間。このような認識が、おおむね政治学という学問の出発点となっていると言えます。現世に「神」のような存在を求めるナイーヴな姿勢は、独裁かポピュリズム注5という悲惨な結末に行き着くのが関の山でしょう。人間の弱さGと向き合いながら、人間にできることを探していくことが肝心です。

〔注〕 1 東ゴート王国——四九七—五五三年。西ローマ帝国の滅亡後、イタリアのほぼ全域を支配下においた

2 バベルの塔の寓話——人間が神の領域にも届く高い塔を建てようとして神の怒りを買ったという旧約聖書の物語

3 アインシュタイン——一八七九—一九五五年。相対性理論などで知られる著名な物理学者

- 4 アングリカン——一六世紀イギリスに成立した、国王を首長とする独自の教会制度。イギリス国教会（アングリカン・チャーチ）と言われる。ピューリタンはイギリス国教会と対立した非国教徒の一派
- 5 ポピュリズム——大衆迎合主義。カリスマ的な指導者が大衆の不満をあおり、弱者の排除や社会の分断を生む

問1 傍線部Aに関する説明として、最も適切なものを次から選べ。

1

- ① 外的にも内的にも自然の法則に従って生きる動物たちが、自然界における真に人間らしい生き方、人間にとっての「善き生」をよみがえらせてくれるという考え方が古代ギリシアの「政治」概念において重視されていたということ
- ② 自らが従う法を自らがつくる、すなわち人為によって自ら運命を切り開くという人間観が、古代ギリシアの「政治」概念と密接に結びついていたということ
- ③ 動物は物理法則という外的な自然の法則を知りえず、本能という内的なそれのみ従う存在であるのに対し、人間はそれらの法則を克服して法を自ら創出するという考え方が古代ギリシアの「政治」概念と密接な関係にあったということ
- ④ 古代ギリシアにおける「政治」概念は、慣習に従って運命を受け入れる技法を分かち伝えようとする人間観を前提とするものであったということ
- ⑤ 古代ギリシアにおける「政治」概念は、定められた運命を何とかして切り抜けていくという動物たちの選択意志に倣うのではなく、人為によって自ら運命を切り開くという人間の選択意志を尊重するものであったということ

問2 傍線部Bについて、どのような変化が生じたのか。最も適切なものを次から選べ。

2

- ① 公的な場で勇敢に振る舞えば運命の女神が褒美を与えてくれるという運命観から、運命の女神は盲目であるがゆえに、いくら努力をしても自身の運命に影響はないという運命観へと変化したということ
- ② 人間の努力とは無関係に最初から定められているという運命観から、法をつくることのできる人間はあらゆる運命のゆくえをコントロールできるという古代ギリシアに由来する運命観へと変化したということ
- ③ 人間の努力によつては決して変えられないという運命観から、人間の力量が運命に対する人為的な対処を短期的には困難でも長期的には可能とするという運命観へと変化したということ
- ④ 運命の女神は盲目であるため、いくら努力しても成果を見てももらえないという運命観から、運命の女神を氾濫する河川と捉え、増水を自然の摂理として受け入れるという運命観へと変化したということ
- ⑤ 人間の努力に関係なくあらかじめ定まっているという運命観から、人間の活動は運命と力量に委ねられ、力量は運命に対する人為的な対処を可能にすると捉える運命観へと変化したということ

問3 空欄Cに入る言葉として、最も適切なものを次から選べ。

3

- ① 図らずも古代ギリシア的な運命観が復活した
- ② 古代ローマ的な運命観を自ら選びとった
- ③ 再び中世的な運命観のまん延した
- ④ むしろ近代的な運命観が克服された
- ⑤ いっそう近代的な運命観が徹底された

問 4 空欄 D 1 から D 3 に入る言葉の組み合わせとして、最も適切なものを次から選べ。

4

D 1 D 2 D 3

- ① ゆえに ― とはいえ ― そのうえ
- ② しかし ― あるいは ― ゆえに
- ③ ただし ― とはいえ ― ですが
- ④ ゆえに ― そのうえ ― つまり
- ⑤ ただし ― そのうえ ― さらに

問 5 傍線部 E の問いに対する本文中での応答として、最も適切なものを次から選べ。

5

- ① 外面的に世界にどう関わるかが問われる政治よりも個人の内面を問う道徳を重視し、中立性を保持するために内面の信念にもとづいて投票を棄権するという方法によって、私たちは政治責任を回避することができる
- ② 政治から逃避することそれ自体が政治的意味を持つという逆説にもとづけば、無為ではなく作為からこそ政治責任が生じるため、私たちが政治責任から逃れる方法はない
- ③ 投票しないという行動によっても自身の政治責任を回避することはできないが、自身の政治的判断を少しでも良いものにしていくために政治学を学ぶという方法によって政治責任を一定程度果たすことができる
- ④ 政治的選択を回避し、流れに身を任せるという「無為自然」の考えにもとづいて、作為だけでなく無為も重んじることにより、私たちは政治責任から一定程度逃れることができる
- ⑤ 道徳が個人の内面を問うのに対し政治は現実世界とどう関わるかが問われ、投票しないという方法すらも為政者に白紙委任状を渡すことを意味するため、私たちの政治責任が解除されることはない

問6 傍線部Fに関する説明として、最も適切なものを次から選べ。

6

- ① 学問においては永遠不変の真理に近づくために探究し続けることができるのに対して、政治においては十分な検討を踏まえずに決断を積み重ねていくことが求められるということ
- ② 学問が外面的な自然と内面的な本能の両方の真理を永続的に探究していくのに対して、政治は内面的な本能のみを克服するために暫定的な結論を出し続ける必要があるということ
- ③ 全知全能の神に近づこうとする人間にとって真理の永続的探究に従事する学問は本来の活動であるが、不十分な検討から暫定的な結論を出し続けることが求められる政治は人間にとって取るに足らない活動であるということ
- ④ 学問においては真理の探究に暫定的に従事するのに対して、政治においては満足のいく検討が行われていない決断を永続的に積み重ねていくことが求められるということ
- ⑤ 学問は全知全能の神に近づこうとする人間にとって万物を統制下に置くために必要な営為であるのに対し、政治は無謬の存在に近づこうとする人間にとって自己の過ちを見つめ直すために必要な営為であるということ

問7 傍線部Gについて、どういうことか。最も適切なものを次から選べ。

7

① 投票しないという行動によって政治的選択を回避してしまう自身の弱さと向き合いながら、投票行動以外の政治的活動を可能な限り模索していくことが大切だということ

② 絶対的な権力者や合議体に判断を委ねてしまう人間の弱さと向き合いながら、それに抗うために民主主義という政治体制において人民こそが神に代わる善なる判断主体であると認識することが大切だということ

③ 本能をある程度しか統御できないという人間の弱さゆえに、かつての完全に善なる神の役割を国家と独裁者のいずれに委ねるべきかという判断を下す際のバランス感覚がますます重要になるということ

④ 自らに課した法ノモスによって自らをコントロールする能力よりも自然法則ビュシスとしての本能が勝ってしまう人間の弱さと向き合いながら、その弱さを大衆という集団が持つ力によって乗り越えていくことが大切だということ

⑤ かつての神に代わって絶対的な権力主体に判断を委ねてしまう人間の弱さと向き合いながら、本能をうまく統御しつつ人間固有の能力を発揮することで政治的選択を積み重ねていくことが大切だということ

問 8 本文の内容と合致するものはどれか。最も適切なものを次から選べ。

8

① 人間の動物性を強調するホッブズの政治理論は、人間の内面的道徳を人間固有の能力として重視するアリストテレス以来の伝統的な政治学にとって受容しがたいものであった

② マキアヴェッリは運命に対して人為的に対処することができ人間の力量を重視し、運命を「盲目の女神」に喩えて、女神の目がたとえ見えなくても努力を続けていればそれを必ず感じとってくれるはずだと説いた

③ 人間が選択する意志を持つことから人間の行動の予測不可能性が生じ、そのことが社会科学を複雑なものとするため、政治学は利益追求を至上とする単純な人間観にもとづいて研究される必要がある

④ フロムによれば、自らの判断を宗教に委ねていた中世に対し、自ら判断することを課せられた近代人がその重責から逃れるためにとった方法が新たな権威の対象を見つけることであった

⑤ 政治からの逃避それ自身が政治的意味を持つという丸山眞男の指摘は政治的無関心が専制政治を導くことを意味しているため、政治学という学問は政治的選択のための根拠をたとえ検討が不十分であっても示し続ける必要がある

問9 文中の二重傍線部⑦から⑩のカタカナ部分と同じ漢字を用いるものを次から選べ。

9

⑦ ケン身

① ケン賞に応募する

② 質実剛ケンな人

③ ケン虚な姿勢

④ 文ケン講読の授業

⑤ 功績をケン彰する

⑧ セイ貧

① 資料をセイ理する

② セイ寂が訪れる

③ セイ巧な機械

④ 旺セイな食欲

⑤ 一服のセイ涼剤となる

⑨ 旧ヘイ

① 日光を遮ヘイする

② 紙ヘイを数える

③ 他国をヘイ合する

④ 財政が疲ヘイする

⑤ 度を超えた冗舌にヘイ口する

⑪ 悔コン

① コン談会に参加する

② 遺コンを残す

③ 玉石コン交のネット情報

④ 貧コンの連鎖を食い止める

⑤ 事実無コンの言いがかり

13

⑫ 半神半ジュウ

① 不平がジュウ満する

② 苦ジュウの決断

③ 反対派を懐ジュウする

④ 飛行機を操ジュウする

⑤ ジュウ医師を目指す

第二問 左は、高階秀爾『エラスムス 闘う人文主義者』の一節である（ただし、一部改変した）。これを読んで後の問いに答えよ。

『自由意志論についての評論』——ルターへの反対表明

一五二四年、エラスムスは『自由意志論についての評論』と題する一書を公けにした。これは、エラスムスがルターの考えに對して正面から A を表明した最初のデモンストレーションであった。事実それは、当時の状況においては、何より「デモンストレーション」としての効果を持った。つまり、それまでキリスト教世界を二分するようなルター派とローマ教会との対立においてきわめて曖昧な——とほとんどすべての人びとから思われてきた——立場を取り続けてきたエラスムスが、これによってはじめて反ルターという旗幟を明らかにして見せたのである。

そのことは、エラスムス自身必ずしも望んだことではなかった。彼はペンの上での論争は好んでこれを行ない、時には随分激しい筆致で相手を批判攻撃することはあったが、政治的な問題に捲き込まれることは決してせず、ましてある党派の代弁者になることなど、およそ彼の嫌悪するところであった。これほどまでに激しい対立の時代において、いやそのようにはつきりと対立した考えが支配的な時代であったからなおのこと、彼はあくまでも自己の精神の独立を守り抜こうとした。彼は論争をするにしてもグループには与せず、どこまでも自分ひとりで行うとする人であった。

しかしこの時代に、宗教的な論争をして、しかもどちらかの党派に加わらないということはきわめて困難であった。たとえばんな神学上の問題を論じて、そこには政治的意味合いがついてまわった。ましてエラスムスは、新約聖書の校訂や教父たちの思想の注釈においてすでに優れた仕事を多く残しており、豊かな人文主義的教養と神学上の知識によってヨーロッパの精神界全体に君臨していた人である。彼の発言は、政治的、社会的に大きなハ紋をまき起こさずにはいかなかったろう。そのことを、エラスムスは十分に承知していた。

B それなればこそ彼は、ルターの問題についてはできるだけ態度を曖昧にしていたのである。もちろん最初のうちは、エラスム

スといえども、ルター(注4)の「九十五カ条」があれほどまで大きな対立に発展するとは考えていなかったという事情はあったろう。エラスムスに限らず、ローマ教会の内部においても、はじめはそれは修道会同士の争いぐらいにしか考えていなかった（アウグステイヌス修道会の修道士であったルターが、ドメニコ修道会の免罪符販売を攻撃したからである）。

一五一九年という時点において、エラスムスにとって最も重要な関心事となっていたのは、聖書の本文校訂についてイギリス人のエドワード・リー(注5)とのあいだにかわした論争であった。しかしそれから二年後、ルターに正式の破門状が発せられ、ウォルムスで国会が開かれて、そこでルターが審問されるという状態にまで事態が発展した時には、事の重大さはすでに誰の眼にも明らかであった。それでもエラスムスは、あえてその対立に捲きこまれることはしなかった。

「立ちあがら」ないエラスムスへの不満

彼のそのような「優柔不断」な態度が、結局ルター派とローマ教会派との双方に期待と不満をもたらす結果になった。実際、どちらの派にせよエラスムスの權威を自分たちの味方にするのができたらどれほど力強いことかと考えるのは、当事者たちにとって当然のことであつたろう。

教皇ハドリアヌス六世（一四五九—一五二三）はエラスムスに手紙を送って、ルターの異端の説を論破できるのはエラスムスしかないから、教会のためにルターへの反論を書いてほしいと頼んだ。いや教皇のみに限らず、エラスムス自身ツヴィンゲリ(注6)に宛てて書き送っているように、「教皇からも皇帝からも、諸コウや君主たちからも、学識優れた友人たちからも」同じような要請を受けていた。

しかし一方、ルター派の人びとも、エラスムスがルターの弁護に「立ち上がる」ことを期待していた。一五二二年、先に触れたウォルムス国会の帰りにルターが反対派に襲撃されて殺されたというニュース——もちろんそれは誤報であつたが——が伝わった時、ルターの支持者のひとりであつた画家のアルブレヒト・デューラーは、「キリストの騎士」エラスムスがなぜ立ち上

がらないのかとその日記に書きつけたほどである。

このような双方の陣営からの「期待」は、当然、「立ち上^ラがら」ないエラスムスに対する不満ともな^レて表われた。ローマ教会の内部ではエラスムスはルター派だという非難が強まり、ルター派の方でも、たとえばフッテン^(注7)のようにエラスムスに激しい批判を浴びせる人びとが登場してきた。エラスムスは、いわばどちらの側からも旗幟を鮮明にすることを迫られていたわけである。

したがって、『自由意志論』^Cは内容がいかに神学上の問題に限定されているとしても、当然に政治的効果を持たざるを得なかった。南ザクセンの支配者であったゲオルグ大公が、エラスムスがこの論文をもう三年早く書かなかったために、あらゆる種類の混乱が起きたと言ってエラスムスを非難したのも、ここに至^リてやっとエラスムスが反ルターの立場を明らかにしたと受け取ったからこそなのであ^つて、議論の内容よりもその立場の宣言の方が大公にとっては重要な意味を持っていたのである。

もちろん明敏なエラスムスは、そのような周囲の状況を百も承知であ^つた。百も承知であ^つたからこそ、彼は三年でも何年でもそれを遅らせようとしたのである。エラスムスがルターに対し、長いこと自分の態度を明らかにしなかつたということは、当時の両陣営の人びとのみならず、後世の人びとにとってももどかしいことであ^つた。この点に関しては、ホイジンガ^(注8)がでさえ、それは「最終的な結論を抽^ひき出すことを望まない、あるいはそれができない」エラスムスの生まれつきの性向の表われであ^つて、それこそが彼の「全人格をつらぬく悲劇的な欠陥」であると言っている。

しかしこの対ルターの問題において、エラスムスにあれほどまで長いあいだ態度決定をためらわせたものは、

D

であ^つたように思われる。「最終的な結論を抽^ひき出すことを望まない、あるいは

はそれができない」ところに、エラスムスの思想的態度の特性のひとつが見られることは明らかであるとしても、それは彼の生まれつきの「欠陥」であるよりは、むしろエラスムスの思想の根本と結びついているものであ^つた。少なくとも、そこに彼の「気質」を読み取ることができるとしても、それは彼の精神の内部においては、柔軟でしかもしぶとい理性によ^つて支えられていた。そのことは『自由意志論』における彼の論理の進め方においても、はつきりとうかがうことができる。ルターの登場する

以前から平和の訴えを叫び続け、ルターとの論争に心ならずも捲きこまれるようになってからでも、繰り返す *concordia*, *concordia* (*concordia* はラテン語で調和、相互理解の意) と訴え続けたエラスムスにとっては、キリスト教世界を分裂させ、対立させるような「最終的結論」は無用のものであった。

「同信のキリスト教徒と相争うよりも、キリストの心を注ぎ入れる方がはるかに大切」だと考えるエラスムスは、「教会の擁護」のために異端者ルターを断罪せよという教皇やその周囲の人びとの要請に対し、心のなかでひそかに、憎しみや争いをもたらして何が「教会の擁護」かという、憤りにも似た激しい思いをじっと噛みしめていたに相違ないのである。

「自由意志」をめぐる——ルターとの論争

事実そのために、エラスムスは、その対立と抗争にあえて油を注ぐような「最終的結論」は、いかに強く要求されても断固としてこれを拒み続けた。一五二一年十月、四年間の滞在の後にルーヴァンを去ってバーゼルに移るようになったのも、ひとつには新約聖書の新しい版の刊行やそのほかの出版活動の仕事があったからではあるが、何よりも、ルターに対して最も先[⊕]エイに反対の態度を示すルーヴァンの人びとの狂熱に捲きこまれないためであった(そして事実、一五二〇年六月、教皇レオ十世がルターを異端者と宣告し、彼がその異端説を撤回しない限り破門するという勅書を発令したのは、ルーヴァン大学の神学部が提供した告発資料にもとづいてのことであった)。

双方の対立がもはやどうしようもないところに来て、エラスムスがついに『自由意志論』の筆を取るまで、彼が望み続けたものは E であった。最初のうちは、彼は必ずしもルターに同調するのではないと断りながらも、ローマに対してルターを弁護し続けた。エラスムスの論理は、たとえルターを思想を容認しないとしても、そのために彼を断罪し、分裂をもたらしてはならないということであった。ここにわれわれは、後の啓蒙主義の時代にまでつながる彼の「寛容」の精神を見ることが出来る。彼は聖書の校訂に関して、多くの神学者たちと時にきわめて激しい口調で論争した時でも、相手の言い分に認め得る

点があればこれを認め、ヘブル人への手紙(注9)の読み方についての論争でジャック・ルフェーブルから「不敬」の非難を受けたときでさえ、それに反論しながら、後に彼の方から和解の手紙を送っている。

それに思想的內容から言っても、少なくとも最初のうちは、エラスムスはルターに反対すべきものを持たなかった。ルターの言葉遣いが時にソ暴(注10)に過ぎるということを別にすれば、免罪符に対する攻撃でも教皇の權威に対する批判でも、エラスムスにとっては十分に首肯し得るものであった。それどころか、エラスムスは『痴愚神札讃』(ちぐしんらいざん)において、すでに同じような批判を行なっている。エラスムスが時にルター派だと見られたことも、必ずしも根柢のないことではなかった。それだけに、最初は和解させようとし、次いで沈黙し、いよいよ最後に筆を取らなければならなくなった時には、ルターと見解を異にする最も本質的な論点を取り上げなければならなかった。

このようにして、ヘンリー八世によって示唆されたという「自由意志」の問題が、エラスムスとルターの対決のテーマとなることとなったのである。われわれはここでも、党派の争いをできるだけ避けようとする思想家エラスムスの良心を見ることができらるだろう。

エラスムスのこの態度は、少なくとも当面の論敵であったルターには正当に受け取められた。ルターは『自由意志論』の刊行された翌年、さっそく『奴隸意志論』を書いて逐一エラスムスの議論に反駁(はんぱく)を加えたが、しかしそれでも、エラスムスが問題を提起するにあたって、免罪符とか教皇制とか煉獄(れんごく)のような些末(さまつ)なことではなくて、最も本質的な重要な問題に正面から触れてきたことを感謝した。ただ、「最も本質的」な問題にかかわるものであっただけに、^FルターGの反論はきわめて手厳しいものであった。エラスムスは、さらにそれに対して、あらためて『反論』を発表した。

問題となったのは、エラスムスの論文の標題にあるように、救いに至るために人間の自由意志は何をなし得るかということであった。救いはすべて神の恩寵(おんちよう)によると確信していたルターは、人間が自由意志によって、何か善い行ないをすることによって救いへの保護を得るという可能性を完全に否定した。ルターによれば、原罪を背負った人間は、自由意志のなし得る最大の善をなす時でもなお致命的な罪を犯すものであり、どんなに偉い聖人といえども、自己の善行によって救われるものではないと主張

した（ルターのこの主張が、聖人というものは自己を救い得る以上に多くの徳行を積んでいるから、その余った功績をいわば積立てておいて、功績の少ない人に配分するのだという免罪符の論理を根底からくつがえすものであったことは、改めて指摘するまでもない）。それどころか、神の前に功績を得ようという目的でなされるなら、善行すらも「罪」であるとルターは断言したのである。

それに対してエラスムスは、人間は不完全な存在であり、自由意志によって行ない得る善はきわめて微々たるものではあるが、それに対して、恵み深い神は特別な報いを与えるのだと主張した。つまり、人は、わずかながら自己の救いを得るために神と協力するのである。

人間の救いは神から絶対的、一方的に来るものであるか、あるいは多少なりとも人間と神との協働によるものであるかというこの議論は、神学的に言うなら、ローランド・ベイントン^(注10)の指摘する通り、「人間の自由」というよりもむしろ「神の全能」の問題であつたのかもしれない。しかし門外漢の私には、神学上の問題を云々する資格はない。むしろ私がこの論争で興味を引かれたのは、それぞれの論文での議論の立て方や、その内容を通して明らかとなってくるこのふたりの思想家のものの考え方、ことに真理についての考え方の決定的な差である。それは、このふたりのキリスト者が——性格的には正反対でありながら——信仰についての考え方の上ではきわめてよく似ているものを持っていただけに、その違いはいっそうはつきりとクローズアップされて、われわれの眼の前に提出されてくるとも言えるほどである。

この論争で問題となつたのは、信仰の有無でもなければ信仰の質の違いでもなく、同じような信仰の内部における解釈の違いであつた。ふたりはともに敬虔^{けいけん}な信仰の持ち主であり、いずれもその信仰の拠^よりどころとして聖書の言葉を引用した。聖なるテキスト、神の言葉としての聖書の価値は、エラスムスにとってもルターにとっても絶対であつた。そのことは、エラスムス自身『自由意志論』のなかで明確に述べている。「ここで問題となつているのは、聖書の価値ではない。事実どちらの側も、同じ書物を受け取り、崇めている。議論は、その聖書の意味にかかわっているのである」。

聖書学者エラスムスの方法

エラスムスはさらに、同じ『自由意志論』の冒頭において、彼自身の議論の目的は「真理を、もし出来ることならいつそう明らかにしてみせること以外にはない」と宣言し、ルターとの論争が、「真理の進歩」にとって好ましい結果をもたらすものであることを願っていると述べている。したがって彼の議論は、もちろん党派的な対立や分裂を深めるための政治的意図を持った非難攻撃の論ではなく、それどころか相手を説き伏せようとするものですらなかった。エラスムスは「実際にしばしばその例が見られる通り、白熱した議論の最中で真理を見失ってしまうことなく、いつそう確実に真理に達するため」激しい言葉はいつさい使わないとさえ言っている。そして事実、エラスムスの礼儀正しい議論に対しては、ルターも十分礼を尽くして応酬しているのである。

それゆえエラスムスにとっては、「真理を明らかにする」ことが当面の課題であった。そのためにはどうすればよいかという方法論も、エラスムスにはつきりと述べている。それは、さまざまのテキストとさまざまの議論をつき合わせ、対照させるという人文主義的方法である。なぜなら「このような探究法は、これまでにずっと、学者にとっては特に推賞すべきものと考えられて来た」^Hからなのである。「私は聖書の言葉どうしをつき合わせることににより、あたかも火うち石をぶつけ合わせると火花が飛び出すように、そこから真理が飛び出してくることを信じて疑わない」という彼の言葉は、優れた聖書校訂者であり、ユマニスト^(注1)であつたエラスムスにまことにふさわしい。

〔注〕 1 ルター——一四八三—一五四六年。ドイツの宗教改革者。免罪符に憤り抗議書九十五カ条を公表（一五一七年）。

宗教改革のはじまりとなる

2 エラスムス——一四六九—一五三六年。オランダの人文主義者。パリ・ソルボンヌ大学に学ぶ。古典語学に造詣が深く、多くの古典の校訂・注釈・出版に尽力した。宗教改革では、終始ローマ教会側にと

どまるものの新旧両派から批判を受け、晩年は不遇だったと言われている

- 3 新約聖書の校訂——いろいろな言語で書かれている現存する聖書を、比較し、複合的に検討することで聖書の元来の読み方を研究・評価・決定しながら、より神のことばに近い聖書を確定する作業
- 4 九十五カ条——ルターによって書かれた免罪符に対する批判・抗議の文書。一五一七年一〇月三十一日ヴィッテンベルク城教会の扉に貼付された
- 5 エドワード・リー——一四八二頃—一五四四年。イギリスのヨーク大主教。ルーヴァン大学でギリシャ語を研究し、そこでエラスムスに出会う。しだいにエラスムスとリーは論争となり、リーは伝統主義を擁護
- 6 ツヴィングリ——一四八四—一五三一年。スイスの宗教改革者。ルターの宗教改革に共鳴したが、途中から意見の相違で対立。宗教内戦で戦死
- 7 フッテン——一四八八—一五二三年。ドイツの人文主義者。愛国主義的立場からルターを支持した
- 8 ホイジングア——一八七二—一九四五年。オランダの歴史家
- 9 ヘブル人への手紙——新約聖書の中の一書
- 10 ローランド・ベイントン——一八九四—一九八四年。アメリカの宗教改革歴史家
- 11 ユマニスト——人文主義や人道主義の立場をとる人。人間性や人間愛を重んじる人

問1 空欄Aにあてはまるものはどれか。最も適切なものを次から選べ。

14

① 賛同

② 共感

③ 合意

④ 反対

⑤ 支持

問2 傍線部Bについて、なぜ態度を曖昧にしていたというのか。筆者の説明として、最も適切なものを次から選べ。

15

① エラスムスは、神学上の問題についての論争は好むものの、親しい友人であるルターの批判は避けたかったから

② エラスムスは、政治的な争いにおいて、一方に与して中立ではない立場で問題に関わることを極端に嫌ったから

③ エラスムスは、自己の精神の独立を守るため、社会的に大きな影響を与えることになる発言をしたくなかったから

④ エラスムスは、すでに優れた仕事を数多く残しており、いまさらその名声に傷をつけたくなかったから

⑤ エラスムスは、すでに宗派上の特定グループに属していたが、政治的な対立にまきこまれることを恐れ、それを隠していたから

問3 傍線部Cについて、なぜそうなったのか。最も適切なものを次から選べ。

16

① ローマ教会によるルターの正式な破門は、実は聖書本文校訂についてのエラスムスとイギリス人エドワード・リーの論争が一つの原因になっていたから

② ルターの「九十五カ条」による宗教上の問題提起が、教皇や君主にとって自己の権益を拡大するための好都合なきっけになったから

③ エラスムスは、はじめローマ教会派とルター派の双方から期待されていたが、あくまでも中立の立場で両派に対していい顔をしてしまったから

④ はじめは単なる神学上の論争とされていたが、ローマ教皇のみならず神聖ローマ帝国皇帝も関与する政治問題からさらに内戦へと発展したから

⑤ エラスムスは、はじめローマ教会派とルター派の双方から期待されていたが、エラスムスの「優柔不断」な態度に両派から思想的立ち位置が厳しく問われていたから

問4 空欄Dにあてはまるものはどれか。最も適切なものを次から選べ。

17

① 彼の性格の「欠陥」ではなく、ローマ教会の権威を否定したらキリスト教も否定することになるという不安

② 彼の性格の「欠陥」ではなく、キリスト教の権威であるローマ教会から破門される恐れ

③ 彼の性格の「欠陥」であるよりも、やはり自由な思想家でありたいという彼の強い意志

④ 彼の性格の「欠陥」であるよりも、信頼するルターを全面否定することは避けたいという彼の意志

⑤ 彼の性格の「欠陥」であるよりも、学者は政治的問題に関与してはいけないという彼の学問観

問5 空欄Eにあてはまるものはどれか。最も適切なものを次から選べ。

18

① 分裂

② 和解

③ 譲歩

④ 謝罪

⑤ 同調

問6 傍線部Fについて、ルターはどのような主張を行ったと筆者はいうのか。最も適切なものを次から選べ。

19

① 救いはすべて神の恩寵であるが、原罪を背負った人間が自由意志のなし得る最大の善をなす場合にだけ救われる可能性が生まれる

② 救いはすべて神の恩寵であるが、聖人が多く積み上げた徳行だけは例外であり、その余った功績を人々に配分できる

③ 救いはすべて神の恩寵であり、人間が自由意志のなし得る最大の善を行ってもむだだから、徳行に励むことはやめるべきである

④ 救いはすべて神の恩寵であり、人間が自由意志で何か善い行いをすることによって救いへの保護を得るという可能性はまったくない

⑤ 救いはすべて神の恩寵であり、人間が自由意志のなし得る最大の善を行ってもむだだが、善行に励むことでよい結果が期待できることもあり得る

問7 傍線部Gについて、エラスムスはどのような主張を行ったと筆者はいうのか。最も適切なものを次から選べ。

20

- ① 救いは神の恩寵であるが、神は人間の自由意志による善行の多さによって特別な報いを与える
- ② 救いは神の恩寵であり、不完全な人間がなし得る善はそもそも限られているから善行は無意味である
- ③ 人間は不完全な存在であり、行い得る善もきわめて微々たるものと神ははじめからわかっている
- ④ 人間は不完全な存在であり、自由意志によって行い得る善はきわめて微々たるものではあるが、神に働きかけることによって人は救われる
- ⑤ 人間は不完全な存在であり、自由意志によって行い得る善はきわめて微々たるものではあるが、それに対して、恵み深い神は特別な報いを与える

問8 傍線部Hについて、どういうことか。最も適切なものを次から選べ。

21

- ① エラスムスは、「火うち石をぶつけ合わせると火花が飛び出すように」、激しい言葉を用いてルターを批判したということ
- ② エラスムスは、聖書校訂者にふさわしく聖書の文言を縦横無尽につむぎだし、ルターに反論の余地を与えない緻密な主張を行ったということ
- ③ エラスムスは、ルターとの論争において、相手を攻撃したり説き伏せようとするのではなく人文主義的真理探究の方法を堅持したということ
- ④ エラスムスは、聖書のさまざまなテキストや議論をつき合わせる人文主義的方法をもともと得意としていたということ
- ⑤ エラスムスもルターも敬虔な信仰の持ち主であり、聖書の文言を引用すれば、合意形成が可能であると信じていたということ

問9 文中の二重傍線部⑦から⑩のカタカナと同じ漢字を用いるものを次から選べ。

22

⑦ 君リン

① リン業に従事する

② リン理学を学ぶ

③ リン時休業

④ 自転車の後リン

⑤ 迷惑なリン人

23

⑧ ハ紋

① 海外にハ遣する

② 二階級を制ハする

③ 建物をハ壊する

④ ハ浪警報

⑤ 状況をハ握する

24

⑨ 諸コウ

① コウ太子

② 王コウ貴族

③ 鉄筋コウ造

④ 金融大恐コウ

⑤ 原コウを書く

25

⑩ 先エイ

① エイ遠の輝き

② エイ雄をたたえる

③ エイ枯盛衰のことわり

④ エイ利な刃物

⑤ エイ画を見る

26

⑪ ソ暴

① 敵をソ撃する

② 侵入をソ止する

③ 緊急ソ置

④ ソ相を詫^わびる

⑤ 重いソ税